

8 スッポンの病害研究 - IV

照屋忠敬、金本自由生、玉城正雄

我が県は周年温暖な自然条件に恵まれており、スッポンの養殖が有望視されている。その養殖の歴史は浅く昭和45年から始まったばかりで、養殖上解決すべき問題がまだ多く残されている。特に疾病対策についてはまだ明確にされていない事が多い。

そこで、これらの疾病の実態を明らかにし、予防・治療対策研究を行い、スッポン養殖業の安定的な発展を期す目的で調査研究を行なった。

本年度は最終年度にあたり、50～52年度のとりまとめを行なった。詳細は昭和52年度指定調査研究報告書病害部門にて報告したので、ここでは要約にとどめる。

要 約

- (1) 大分内漁試(1977)のスッポンの疾病の種類は、細菌性疾病、ムコール病、ひふぐされ病、付着性繊毛虫寄生、餌料性疾病と多いのに対し、当地方のスッポンの疾病は、細菌性疾病、ひふぐされ病、付着性繊毛虫寄生と少なかった。
- (2) 昭和49年度～50年度におけるへい死量の調査の結果、冬眠あけの2、3月に水温が上昇するところと、8月下旬ごろから9、10月にかけて水温が下降するところにへい死の山がみられた。51年度に水質調査を行ったが、へい死との関係はみいだせなかった。
- (3) 健康及び罹病体、環境飼育水及び泥土より細菌分離を行った結果、罹病体及び水温上昇期、水温下降期に池水から *Aeromonas* が主に分離され、よって *Aeromonas* が最も疑われるが、多方面からの総合的検討を行わなければ原因を明確にするのは困難であると思われる。
- (4) *A. hydrophila* に対する BAY 9391 の薬効試験の結果、接種菌数 10^6 に対し、BAY 9391 - 25 mg/kg × 2 日投与で薬治効果がみられた。
又、ニフルスチレン酸 Na クロラムフェニコール、ナリジクス酸、スルファモノメトキシ N Na の MIC はニフルスチレン酸 Na、クロラムフェニコール、ナリジクス酸、スルファモノメトキシ N Na の順であった。*A. hydrophila* は耐性を獲得しやすいように思われた。
- (5) ヘマトクリット値及び血清タンパク量の健康値の幅は Ht が 25 - 35% で SP が 4.0 - 6.0 g/dl であった。異常値は Ht、SP とともに広範囲になるのが特徴的で、*Aeromonas* 人工感染試験や絶食試験において Ht、SP とともに健康値より低くなる傾向がみられた。

残された問題

現在までの調査の範囲では疾病の原因は、はっきりせず予備調査の域を出ていない。

今後、(1)症状の把握、分類、(2)それらが、何に起因するのか(細菌、ウィルス、カビ等)、またそれらがどのように複合感染しているのか、(3)病理組織や血液性状、(4)治療剤投与による耐性菌の問題、(5)スッポン自身の生理学的問題等、多方面からの総合的研究が必要である。